

十歳で首都キーウに引っ越したとき、地元の人々は見慣れぬ日本人家族を歓迎し、すぐに受け入れてくれた。その印象はいまま変わらぬ。

「激戦地のドンバス地域でも、兵士たちは私を歓迎してくれます」

寺島さんはキーウ在住だが、英字紙の記者としておもに東部ドンバスの最前線で戦う兵士たちの生の声を伝えるルポを書く。ウクライナ語・ロシア語・英語を駆使して、取材先探しから移動の段取りまで、すべて自分で行なう。欧米の大手メディアが、地元のコーデイナーや通訳、運転手、警備員、カメラマンなどとチームで活動するのは異なる。

「でも私は自分でやる方が好きです。取材される兵士も大勢に囲まれカメラを向けられたら身構えてしまいます。地元の小さなメディアだから伝えられることがあるはず」
最も大切なのは時間をかけて信頼を築くことであり、取材を超えた友情があるからこそ聞ける純粋なストーリーが、世界の人々の心を動かすと信じている。

自由のために戦う普通の人々

「兵士」の多くは、ロシアがウクライナに侵攻した二〇二二年二月まではごく普通の市民だった人々だ。

「電気技師、ITスペシャリスト、トラックスの運転手……職業はさまざまで、いまでも自分を兵士だとは思わない人が多いです。出身地も年齢も言語も異なる人たちが共に戦っています。彼らが最も恐れているのは、自分



「ウクライナの人
はオープンで温かい」

今月の

顔

てらじま あさみ
寺島 朝海さん

キーウ・インディペンデント紙
記者

大阪生まれ。6歳から10歳まではロシアのモスクワで日本人学校に通い、10歳のときからはウクライナのキーウ在住。インターナショナルスクールを経て、アメリカ・ミズーリ州の大学で1年過ごしたのち、キーウに戻ってオンライン受講で2022年に卒業。在学中の20年から英字紙キーウ・ポスト紙で働き、21年11月にキーウ・インディペンデント紙創刊時より現職で、学生と記者を両立させていた。22年2月のロシアのウクライナ侵攻後もキーウに留まり、報道を続ける。寺島さんの記事(英文)および媒体の活動支援はこちら:

<https://kyivindependent.com/author/asami-terajima/>

の死よりも、自分のミスで仲間の命を失うことです。だからスキル習得も早い。でも、勇敢だ」と言う。そんなことはない」と返されます。やるべきことをやるだけだ」と

寺島さん自身も、二〇二二年二月には二十一歳の大学生だった。コロナ禍ではアメリカの大学の授業をオンラインで受講し、英字紙にビジネス関連の記事を書いていた。ロシア軍の侵攻により、両親をはじめとする多くの人が国外に避難したが、彼女はキーウに残った。その理由を聞くと、「そうすべきだと感じたからです。ほかのどこにも行きたくなかったし、自然とこうなったのです」と答える。自由を重んじるウクライナ人の精神に共感を覚えたのは、二〇一三年のユーロマイダンを目のあたりにしたときだった。当時の大統領の親露政策に反対した市民が、自由を求め広場に大挙して集まった抗議運動だ。

「日本では民主主義で平和なことに慣れ、それがあたりまえのことだと思っています。でもウクライナでは、次世代が自由に暮らすために戦う覚悟があります」

寺島さんが勤めるキーウ・インディペンデント紙は、伝統ある英字紙を買収し報道内容を制約する新オーナーに反対し、解雇されたスタッフが新たに立ち上げたメディアだ。言論の自由への思いは強い。

「たとえば軍の広報担当は、ポジティブなニュースしか出したがりません。でも私たちは戦地でほんとうは何が起きているのか、国を守るためにどんな犠牲を払っているかを伝える必要があると思っています」



*写真はいつでもドンバスで取材する寺島朝海さん



日本、ロシア、ウクライナ、アメリカに住んだ体験は役に立っていると言う。「いろいろな文化を体験した視点があるので、ウクライナ人にはあたりまえのことも、異なる視点で伝えられます」

つらい日々を乗り越えるには

いま最もつらいのは、ドンバスを離れてキーウに戻るときだ。

「兵士たちは毎日仲間の誰かが殺されるような状況のなかで次は自分かもしれないと思っています。ほんとうの別れになってしまいかもしれない兵士たちを残し、私はキーウに戻り記事を書かなくてはならない。そしてキーウではほぼ通常通りの日常生活ができ、バーやカフェも営業しています。兵士たちも一時帰省すると戦地とのギャップにショックを受けます。戦争が長期化し、多くの人がセラピーを必要としている。兵士たちは疲れていますが、前向きな気持ちを持ち続けたいとさらにつらいからお互いに励まし合い、ジョークで笑い合う。私にも、またおいで」とウクライナの国外にいる私たちに、どんなサポートができるだろうか。

「西側諸国では戦争報道に疲れて読まれなくなっている傾向がありますが、戦場では疲れたと言ってもらえません。国際社会として非人道的な戦争犯罪を一つ残らず監視し続けることも、サポートの一つです」

見逃されそうなお大切なストーリーに光を当てたいと、今日も彼女は取材を続けている。

(取材・文 松島あおい)